

主 題：幸福に降服する2
聖書箇所：マタイの福音書 5章3節

1ヶ月ほど前のある新聞記事に、アメリカ・ブラッドリー大学の心理学研究チームが世界53ヶ国の、約17,000人を対象に国別の自尊感情についてのリサーチを行なった、その調査結果が掲載されていました。自尊感情、英語ではself-esteemと言いますが、日本語の辞書では自負心、自尊心ということばで訳されるものです。自分のことが好きなのかどうか、自分の能力に自信があるのか、そのようなことがこの自尊感情によって現わされるのです。その問いの一部は(1)あなたは自分のことを肯定的に捉えていますか？(2)あなたは他の人と同等、または、それ以上に仕事ができると思っていますか？というものです。53ヶ国中、日本は何番目くらいだと思われませんか？何と53位、自尊感情が最も低い国であると報じられていました。これは、私たち日本人が本当に私たちのことをどうしようもない卑しい存在だと、そのように考えていると私たちに教えているものでしょうか？そうではないと私たちは実際の生活を考えたときにもう知っているのかもしれませんが。確かに、このような研究結果を見ると、日本という国がまるで自尊心のない人たちの集まりのように見えるのですが、必ずしもそうではないことを私たちはよく分かっています。このような研究を見て行くと、比較的西欧の個人主義の国というのは自尊心の高い人たちが多く、集団で生活する国の人たちは自尊心が低いという傾向にあります。この調査結果の下から10番目くらいの中のほとんどは、いわゆる東洋の国でした。私たちに近い生活習慣、文化体系をもっている国です。そのようなことも影響するでしょうし、私たち日本人は謙遜というのを美德と考えます。ですから、私はこんなにすばらしいのです！たとえば私が皆さんの前で言ったとすると、皆さんはきっと何と高慢な人と思われるでしょう。ですから、私たちはたとえそのように思っているとしてもそのようには言わないのです。ですから、私たちは何か良いことをしたとき、何かすばらしい成果を上げたとき、あなたよくやりましたね、と人から言われると、いやいやとんでもありません、私なんて取るに足りない者ですということばが出てくるのです。でも、それはときにそのような謙遜をもってもっとほめてください！と言っているのではないのでしょうか？私たちはこういう文化体系の中にあって、そのような美德感をもつ中で、表面的な謙遜がすばらしいかのように生きています。けれども、私たちは実際にはそのように言いながら人からの称賛を求め、私は価値のある者だということを人から認められたいと思っているのです。もしそうでないと皆さんがおっしゃるなら、ぜひ、このことを試してください。だれか誉めたいという人を見つけて、その人を誉めてください、あなた良くやりましたね、すばらしいですねと。その人はきっとこう言うでしょう、ありがとうではなくて、いやとんでもないです、私なんて全然できないのですよと。そのときこう答えてください、ああそうですね、あなたやっぱりほんとにできませんねと、その人は間違いなくムツとするでしょう、なんでそんなことを言われなければいけないのかと。でもそう言ったのはあなたじゃないですか！と言いたいのです。本当に謙遜しているのならムツとすることははずです。なぜそのような感情を抱くのかというと、私たちは謙遜という仮面をつけて内には高慢という姿をもっているからです。私は重要でありたい、必要な存在でありたいというのは私たち人間の心からの叫びの一つでしょう。それゆえに、人に対して言うことができる最も厳しいことば、いやなことばは「私はあなたが必要ありません、あなたは全く価値がない、使い道がない、役に立たない、私にとって重要ではない」であり、そのようなことばをかけられるゆえに、自らの存在理由を見失っていのちを断って行こうとする人たちが絶えません。なぜなら、人にとって私を認めてほしい、私は重要であると考えその思いは大切なものだからです。私たち人間は自分の重要性を信じ、それを追い求めて生きています。皆叫んでいます、私は必要なのだと。

私たちの子どもたちの学校教育の中にあって、今日、この自尊感情ということばが使われることがあります。自己価値を見出す、自尊感情を高くする、それはすばらしいことであると世の中は今教えています。なぜなら、そのように自分が好きであること、自分が大切であること、自分が立派であること、自分の能力を認めること、それはその人の健全さを保つことであり、その人に自信を生まれ、将来的な成功をもたらす、勝ち組になるためにそれを持たなければならない、良い自分のイメージをもつためにそれは大事であると、様々な社会的、心理学的研究がそのためになされています。そして、それらはこのように自己像が高くなり良いものであればあるほど、あなたは幸せになることができるという成果を発表しています。本当にそうでしょうか？

この山上の説教、その中でも特に至福の教えというのを見て行くと、イエスはいったいだれが、どんな特徴をもっている人が幸いなのかを教えてください。幸せな人はどのような人ですか？この世の

中にはもしかするとこのように言うかもしれません。しっかりと自己価値をもって自尊心の高いそのような人だと。でも、イエスが言われるのは残念ながらそれとは全く反対のことです。今日皆さんといっしょに見て行きたいことは、この至福の教えの第一番目ですが、それを見ることによって、本当に幸せな人とはどんな特徴をもっているのかということを考えて行きたいのです。確かに、この世は今言ったことを正しいと教え、私たちを説得しようとしています。でも、イエスが何を言われるのかが私たちにとっては大事なのです。聖書が何を教えるのかが大切なのです。それゆえに、私たちはこの5：3のみことばを見ながら、幸せな人はどのような特徴をもった人なのかを考えたいと思います。

☆幸せな人がもっている特徴

5：3「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」、前回も話したように、マタイはこの至福の教えというのを、山上の説教全体の冒頭に置いています。それはこれがこのメッセージの序文であるからです。ここで私たちはイエスがその後何を話して行こうとされるのか、そのことをしっかり知って行きます。山上の説教でイエスが焦点を当てているのは「天の御国」です。どうしてそこに入ることができるのか、入っている者としてどのように生きて行くのか、イエスは天に属する人の特徴を話して行きます。確かに、ここでは多くの群衆がイエスのことばに耳を傾けている様子が記されていますが、イエスが直接に語られていたのは前回も見たようにイエスの弟子たちでした。特に12人の弟子たちに向かってこれらのことばを語っていたのです。この至福の教えの中であってイエスは天国に属する者たちの特徴を教えるのですが、この最初に出てくることばはの中で最も根本的な、これからイエスが語られて行くすべての基礎になることであると言ってもいいと思います。前回も言ったように、イエスが言っている「幸い」は私たちが幸福に感じることではない、これは他の人が見て「あの人は幸せだ、あの人は祝福を受けている」というその宣言です。私たちの感情ではないのです。だれかがそれを告げているのです。神であるイエス・キリストが「この人は幸いである」と宣告してくださるのです。それなら、私たちはこのことばに反論することはできないはずですが、イエスがここで語られていることは当時の人たちにとっても、そして、今の私たちにとっても非常に驚きに満ちたことであり、また、挑戦的なこと、私たちにチャレンジを与えることではないかと思えます。

これから二つの質問に答えることによって、その特徴というのを見て行きます。一つ目は、いったいだれが祝福を受けているのか、祝福されている人の特徴はどんなものなのか、そして二番目に、いったいなぜこのような祝福が与えられているのか、ということです。それによって、いったいどのような特徴をもつ者を神は幸いだとしておられるのかということを知って行きましょう。

1. だれが祝福を受けるのか

幸いを受けているのは霊的に貧困であるという特徴をもった真のクリスチャンです。もう少し詳しく説明しましょう。この至福の教えの中でイエスは八つの幸いを述べておられます。それらは私たち人間が、この社会がこの世が一般的に考える幸いとはほぼ正反対の位置にあるといってもおかしくないでしょう。人々はもしかすると多くの財産をもつことが幸いであると考えているかもしれません。実際に、私はある時に、未信者の婦人の方と話す機会がありましたが、その方は私は幸せになりたいのですと言われました、どうすれば幸せになれるのかとその方に聞いたところ、生活に不自由なくより多くの財産が与えられるなら幸せになれると答えられました。私たちの周りはそのように考えて生きて行きます。そのことを求めて、それゆえに肉体的な、物質的な財産を得ようとやっきになって生きる姿を私たちはよく知っています。しかし、イエスが最初にここで述べる幸いな人の特徴というのは、そのような富んでいる人ではありません。正直、今私たちも「富んでいる人は幸いです」と言われたなら、その通りですと答えるでしょう。でも「貧しい人は幸いです」と言われると、ちょっと待ってくださいと言わないでしょうか？イエスが言われるのは、富や財産を得ることが幸いな人の特徴ではないということです。貧しいことが特徴だと言われるのです。いったいイエスはどのような意味で使っているのでしょうか？そのことを知るために私たちはまず、この「貧しい」という意味を知らなければいけません。ここで使われている「貧しい」ということばは、イエスがルカの福音書の16章で、金持ちとラザロの話をしたときに、ラザロを指して使ったことばです。この貧しさというのは完全な貧困を表わします。それゆえに、物乞いをしなければ生きて行くことができない、そのような人のことばです。ラザロはまさにそうでした。覚えておられますか？金持ちが居てその金持ちの家の門前に病を負って寝ていたラザロ、彼は自分の力で何をすることもできなかった、金持ちが捨てる残飯で生きていたのです。このことばは、毎日の生活を保って行くために、他の人よりも長い時間仕事をしなければならぬというような貧しい人のことを指していません。私たちはそのような人を貧しいと言うかもしれません。しかし、ここで使われていることばは、全く自分の力で何をすることもできないような、自分では生計を立てることができない、自分の能力をどれだけ発揮しても何一つ自分のためになることを得ることができない、そのような

人のことです。このような人は完全な貧困の中であって、自分で生活をサポートするあらゆる方法を剥奪されているのです。これがイエスが語っている「貧しい」ということばです。この人はそのような状態に置かれているゆえに、私は自分の力に頼って何かすること、自分の生活を守ることすらできないとよく分かっている人です。だから、この人はラザロのように人が与えてくれるものによって生活をしたのです。ここで私たちは考えなければいけません。イエスはそのように究極の貧困を体験する人が幸いだといわれたのでしょうか？少し違います。なぜなら、イエスはここであることばを加えているからです。「心の貧しい者」と言います。

この「心の」ということばは、この究極までの貧困がいったいどこで起こっているのかということを示しているのです。それは心で起こっていると言います。物質的貧困ではないのです。「心」ということばは原文では「霊」ということばが使われています。つまり、イエスがここで言われているのは、私たちが霊的に貧困な状態にあることです。いったいこの「心の貧しい者」という表現は人のどのような特徴を表わしているのでしょうか？それは、私には霊的事柄に関して何一つ自分自身に頼ることができないということをはっきり理解している人のことです。この人は謙遜な人であり自分が完全に失われていて、希望も全くなく、自分自身を霊的に保つことができる力すらもっていないことをはっきり知っている人です。それがイエスが描かれる幸いな人の特徴です。ある一人の注解者はこのように言います。「霊的貧困というのは霊的破綻をしっかりと理解していること、これは私が神の前にあって全く無価値であるということを中心から告白することである。それゆえに、霊的貧困さというのは悔い改めの最も深い現われである」と。神殿の前で一人の取税人が祈りました、「神よ、こんな罪人の私をあわれんでください」と。それがこのような霊的貧困さの顕著な例です。これは、私は存在において意味のない者ですということを確認することではありません。また、私は個人的に何の価値もありませんと言えいいというものでもありません。私はまさに罪深く、神に対して反抗的であり反逆的に生き、それゆえに道徳的に霊的に、神の前に私はこんなにすばらしい者ですと言うことが全くできないことを知っていることです。そのような枠組みの中で霊的貧困というのは、私には神が必要だという告白になってゆきます。私たちの多くは何らかの形で自分の価値を認めようとし、価値があると信じようとし、私たちの内には何か良いものがあって、私たちはそれを神の前に表明できるかのように捉えることがあります。しかし、もし私たち自身が自分のことを正しく見つめることがあるなら、神がどのような方であるかをしっかりと理解し、神の基準がどのようなものかを正しく判断し、その光のもとで自分自身を見ることができるなら、私は何と愚かで罪深い者なのか、何と汚れた者なのかと気付くはずですが、多くの人たちは私は自分自身の力で生きて行くことができる、自分で十分だと考えています。けれども、私たちが自分の将来を正しく見つめることができるなら、自分の力では何一つしていないことに気付くはずですが、今、私たちが呼吸していることも自分の力でしているわけではありません。私たちがもっているすべては神のもので、また、私たちの多くはときに自分自身に信頼することができる、依存することができると考えているかもしれません。世の中はそうのように考えて生きています。私には神は必要ない、信仰なんて弱い人がするものだ。でも、私たちが自分自身を正しく見つめるとき、自分の心臓の鼓動一つコントロールすることができない、ましてや、自分の上に起こってくる様々な状況を変えることもできない、私たちは神なしで生きて行くことができるということができるのでしょうか？

私たちが唯一できることは、神の前にへりくだって、主よ、私はあなたが必要だと言うことです。みことばを見るとそのような人が溢れています。イザヤ書6章で、イザヤが神の前に立つときこんなことばを語りました。6：5「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見ただから。」と。預言者イザヤ、彼は神の語られたことばを人々に誠実に語り伝えた偉大な預言者、霊的リーダーです。どうでしょう、今心理学者たちがイザヤのこのことばを聞いたとき、彼は自尊心をもっていたと言うのでしょうか？イザヤだけではありません。パウロはなんと言ったでしょう？彼は大きな働きをしましたが、このように言いました。Iコリント3：6-7「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。：7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」と。神が成長させてくださった、その偉大な神の前には私は何の価値もないとよく分かっていたのです。彼は私でなければこの働きはできないとは言いませんでした。でも、私たちの多くは自分でなければこの働きはできない、自分がいなければだめだ、と言わないでしょうか？もし、そのように思ったなら、私たちはこの幸いな人の特徴を失っているのかもしれませんが。ダビデもまた同じことを告げています。I歴代誌29：14でダビデは神殿を作るそのために彼もまた人々も多くのおさげものをした、そのことを受けて神に祈りをささげます。彼らはすばらしい働きをしました。「まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者なのでしょう。このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても、すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。」。彼は自分たちには何の価値もないことをよく分かっ

ていたのです。他にもたくさんの人たちの名を上げることができます。アブラハムやヤコブ、ヨブやペテロ、皆、主の前にへりくだった人物です。霊的貧困をしっかりと理解して、それゆえに神に完全に依存した人たちを神は大いに用いられたのです。

イエスがここで私たちに教えていること、また、人々が聞いていたことは、多くの人たちに非常に衝撃的なことであつたと思います。特にユダヤ人たちにとって…。人々は霊的貧困が祝福だとは思っていませんでした。彼らは自分たちが受けている相続財産、霊的な物質的なアブラハムの子孫であるというすばらしい祝福が、自分たちを幸いにすると思っていました。また、彼らは自分たちが行なう様々な良い働きが、神の前にほうびを受けるにふさわしいものと考えていました。けれども、そのような高慢が彼らの問題の根源だったので。イエスがここで語られていることは決して新しい教えではありませんでした。この至福の教えのそれぞれすべてが旧約聖書に源があります。旧約の教えをもう一度、人々に語っていたのです。イザヤ66：2で「これらすべては、わたしの手が造ったもの、これらすべてはわたしのものだ。——主の御告げ。——わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。」と、このように神は語っておられますが、これこそまさにイエスがここで語っておられることです。また、ダビデは詩篇34：18でこのように言います。「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。」と。51：17でも「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」と歌っています。霊的貧困というのは本当に神からの祝福を受けた人がもっている特徴なのです。私たちは自分自身を正しく見つめ理解する必要があります。私たちが私たちの存在すべてにおいて、完全に神に依存するものであることを分かっているといけません。これは決して嘘偽り、だましてできることではありません。ある神学者はこのように言います。「霊的貧困というのは自らの手で引き起こすことができるものではありません。自己嫌悪によってそれがもたらされるものではありません。ましてや、人に見られたいと思つて行なう謙遜によつてもたらされるものではありません。霊的に傲慢な、このような特徴を身に付けたいと願っている人たちによつてまねできることではありません。もしかするとそれらの努力は周りにいる人たちから認められることがあるかもしれませんが、あの人には謙遜だという称賛を受けることがあるかもしれませんが、神は決してごまかされません。」と。皆さんは霊的貧困をもっているのでしょうか？それとも日本人特有の表面的な謙遜を身に付けることによつて、神の前でも同じように仮面を付けていないのでしょうか？

また、同時に私たちがよく理解しておかなければいけないことは、このように考えてしまうことに注意しなければいけないことです。霊的に貧困である、あなたは価値がない、あなたは役に立たない、神の前にほめるところなど一つもありませんと言つた時、私たちが考えがちなことは、そのままどんどん下降線をたどつて行き、自己憐憫に陥つてしまうことです。イエスはそのように言われていません。このことに関して、私の敬愛する牧師先生がこんなことを語っておられます。先生はモーセについて話しているときにこのように言われました。モーセが神に召されてエジプトに行きなさいと言われたとき、いろいろな言い訳をしました。私はそのようなことはできませんと言ひ続けました。神はモーセの謙遜を責めたわけではありません。モーセのもつていた確信のなさ責められたのです。そして、このような話をされるのです。無価値さ、または無能力さ、自分の存在意義を見出すことができずに苦しんでいる人たちに対する聖書的解決というのは、自尊心を高めることではない、神はモーセに対してそのように自分自身を責めることを止めなさいとは言われなかつたでしょう、あなたは能力のあるすばらしい人だからこの働きをきなさいと励ますこともされませんでした。神はモーセに、あなた自身の無能力さに目を向けることを止めてわたしを見上げなさいと言われたのです。神は言われました。わたしが口を造つたのでしょ、わたしがあなたとともにいるのでしょ、わたしがあなたを助けるのでしょ、わたしがあなたに何を言うかを教えるし、あなたを導くから、だからわたしに目を向けなさいと。自尊感情の低さに対する聖書的解答は自尊感情を高めることではありません。それは、神の恵み、神の主権的恵みです。私たちはそのことを決して忘れてはいけないのです。

イザヤ41：13-14を見ると「あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。：14 恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。——主の御告げ。——あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。」と神はこのように言われています。別の言い方をすると、私は無価値だ、私は何もできないという、そのような思いに捉われて動くことができなくなった人たちに対して神が解決策として与えられた方法は、わたしはあなたを助ける、わたしはあなたとともにいる、と言われる神の恵み深いことばだと言うのです。祝福を受けた人、祝福に満ちている人、その人はこの事実をしっかりと理解している人です。パウロのことばを思い出します。彼はコリント人への手紙でこのように言っています。「なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」(Ⅱコリント12：10)と。私が何もできないとき神の恵みとその無力さを補ってくださいと。何と幸いなことでしょう。私たちは何一つできないのです、どんなにあがいても。神の前に正

しく生きることなどましてできません。でも、それができないと本当に分かっている、だから神さま私を助けてください、神さま私はあなたに委ねます、あなたを信じて従って行きます、と言ったとき、神は言われます、わかった、わたしはあなたとともにいる。このような確信をもっているなら幸いです。多くの場合私たちは高慢になるか、自己憐憫に陥るかのどちらかです。でも、幸いな人は自分の無価値さを正しく認め、その無価値な者に与えてくださる神の恵みにしっかり目を向けるのです。皆さんは幸いな者ですか？幸いな人の特徴をもっておられますか？

2. なぜ、幸いであると言えるのか

いったいどのようにして私たちが幸いな者となることができるのでしょうか？何が幸いであると言われるのでしょうか？前回もこのことを少し話しました。山上の説教の至福の教えの中に出てくる各節の後半部分というのは、幸いであることの原因、理由を述べています。なぜ、幸いなのか、イエスは言われます、それは天の御国がその人のものだからと。幸いな理由は心が貧しいことにあるのではないのです。それはあなたが天の民だということにあるのです。簡単に説明しましょう。イエスがここで言っていないことは、あなたが心の貧しい者になったら天の御国に入ることができます、だからあなたは幸いなのです、ということです。あなたが幸いになりたいのなら天の御国に入りなさいと言われます。どのようにして天の御国に入るのでしょう？イエス・キリストを信じる信仰によってです。イエスを信じ救われた人は、私には価値があると言いません、私は罪人だと気付くのです。私は神の前に今悔い改めることしかできない、神のあわれみを乞うことしかできない、神の一方的な愛にすがることしかできないと、その姿は心の貧しさを現わします。心の貧しさが今現在の生活にしっかり現われていることによって、その人の国籍が天にあることを証明しているのです。皆さんはどうでしょう？今この瞬間、自信をもって私は幸いですと言えるのでしょうか？皆さんの内にはへりくだりがありますか？皆さんの内には自分自身を捨てて神に完全に信頼し、私は何もできないけれどあなたはそんな私を用いてくださる、だから価値のない私を使ってくださいという、そのような従順な思いに満たされておられますか？

天の御国に属する幸いな人、それは心の貧しい人です。自分自身の自己依存を捨て去って、その代わりに、まるで子どものような神に対する信頼を持つのです。自分に確信を抱き自信をもって生きることが止めて、従順の中に神に確信するようになっていく人、自分で何が正しいのか間違っているのかを勝手に判断し、その行く方向を決めることを止め、神の導き、その恵みに従って生きて行こうとする人、自尊感情を捨て去り、その代わりに、全く無価値な私を救ってください神の栄光のために用いてくださろうとする、その神のあわれみをしっかり身につける、それがイエスの教えです。この世はその反対を私たちに教えます。自分に誇りを持ちなさいと。そう言われたら私はこう答えたいと思います。私は自分には誇りを持たないけれど、私を愛し私を導き私を用い私を励ましてくださり、私の傍に常に居てくださる神に誇りを持ちますと。もし、これをどのような状況の中でも言うことができるなら、私たちは本当に幸いです。何よりも素晴らしいのは、このように砕かれた心をもって霊的貧困の中で神の前に出て行く人たちというのは、その神から遣わされて行くときに、砕かれた心をもっていないのです。なぜなら、神は言われました、おもてを低くしなさい、そうすれば神が高めてくださると。

願わくば、私たち一人ひとりがそのような霊的貧困をもって、神の前に生きて行きたいものです。そのときに、神は私たちを通して素晴らしいみわざを為してくださるでしょう。周りの人たちはもしかすると違うことを言うかもしれませんが、しかし、神は間違いなくあなたを指差して言われます、幸いな人、天の御国はあなたのものだからと…。